

京大 広報

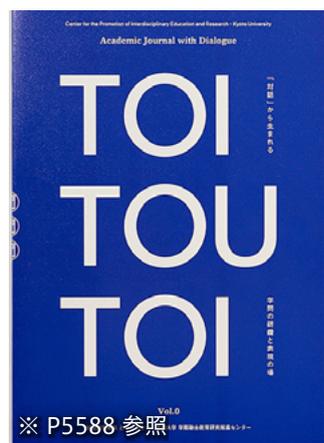
KYOTO UNIVERSITY



※ P5593 参照



※ P5595 参照



※ P5588 参照

2021.9
No. 758

目次

[部局の動き]

- 国内外のフィールドワークを体感できる映像教材を開発・公開 5587
- 学際研究に特化した対話型学術誌「といたうとい」を創刊 5587

[寸言]

「わが家を世界一幸せな場所にする」 仲井 嘉浩 5589

[随想]

「アフリカ潜在力」とオルタナティブな未来の創造 5590
名誉教授 太田 至

[洛書]

頻発する水害と気候変動 佐山 敬洋 5591

[探訪]

● 防災研究所附属流域災害研究センター白浜海象観測所 ～広報課員が行く～ 5592

[話題]

- 本学卒業生の山西利和さんが東京五輪・陸上男子20km競歩で銅メダル獲得 5594
- 株式会社バッファローより医学部附属病院へ屋外用アクセスポイント15台などの寄贈 5594
- 本学若手研究者とシュプリング・ネイチャー編集長による座談会に関する記事が「Nature ダイジェスト」に掲載 5595

[訃報]

- 益川 敏英 名誉教授 5597
- 木村 敏 名誉教授 5598



京都大学





国内外のフィールドワークを体感できる映像教材を開発・公開

本学ASEAN拠点を中心となり、コロナ禍でも学生が安全に国内外のフィールドワークを体感できる映像教材を開発し、同拠点のWebサイトにて一般公開しました。本学は1960年代よりASEAN域で活発にフィールドワークを繰り広げてきましたが、新型コロナウイルス感染拡大により、本学の魅力である国内外フィールドワーク実習・プログラムの見直しを余儀なくされる中、国立大学改革強化推進補助金を活用し、本教材が開発されました。

教材では、森林・海・大規模インフラ工事現場、本学や海外協定校の実験施設の様子などをドローンでの空撮やVR映像も交えながら、教員による専門的解説が端的に行われています。また、教材には、下級生にフィールドワークの手法を分かりやすく伝えるため、学生自身が以前の実習で撮影・編集した映像も含まれます。これらの映像を見た学生からは「今後は実際に現場に行ってみたいと思った」などの感想が寄せられました。

開発した映像教材は、学生・教職員の安全を確保しながら、臨場感を持った教育・研究現場を再現し、また、学習意欲や興味を高める一助として、他大学、国土交通省や企業の関係者からも期待が寄せられています。加えて、今後は本学の特色あるフィールドワークを継承しつつ、調査記録をデジタル化し、海外協定締結校との短期プログラム、日本への留学フェアなどでも幅広く活用する予定です。

【関連リンク】

Kyoto-ASEAN Virtual Fields

<https://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/asean/virtual-fields/>



上賀茂試験地の映像



天ヶ瀬ダムの映像

(学術研究支援室)

[目次に戻る ↗](#)

学際研究に特化した対話型学術誌「といたうとい」を創刊

学際融合教育研究推進センターは、学際研究に特化した対話型学術誌「といたうとい」を創刊しました。

学際的研究の重要性が叫ばれて久しい中、その学術的受け皿は整備されたとは言い難い状況にあります。学際的な研究助成金は措置されている一方で、学際的な研究に従事する専任ポストは多くはありません。なにより、学際研究をするも、研究成果発表の場は個別の学会など、従来の専門分化した場であることがほとんどです。

本誌は、そのような「学際研究は、発表する場（論文誌）がないから進展しない」という状況をなくすことを目的として発刊しました。分野や領域を規定しない論文誌となっています。

創刊準備号 (Vol.0) では、解剖学、精神医学、数学、科学哲学、漆芸、世界史、言語学、



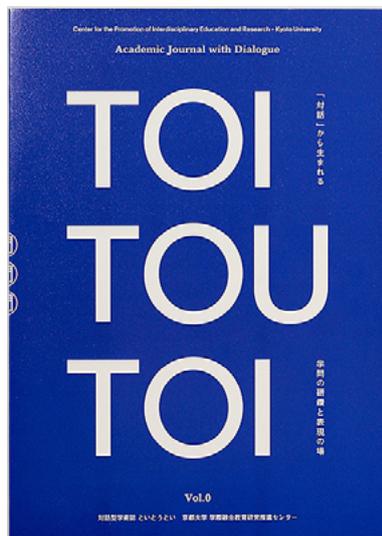
映像人類学、ロボット工学の研究者が、それぞれの「問い」を特定の分野に拘らず考察し、論文の本文に加え、編集委員・識者との査読のやり取りを「対話」として収録しています。さらに、学問表現の可能性を追求したビジュアルとテキストにて新しい論文のフォーマットを目指しています。

自身の研究が既存の学術分野の分類に収まりきらないと悩む研究者や専門や分野の「ルール」に違和感がある研究者、さらには学術に関わる方だけでなく、企業人、経営者、新規事業担当者など、あらゆる分野を超えた対話と学びに興味のある方にとっても、「知」のあり方を見つめ直すきっかけをもたらす一冊になることを期待しています。

【関連リンク】

対話型学術誌『といたうとい』 | 京都大学 学際融合教育研究推進センター

<http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/project/toitoutoi/>



表紙 (撮影：伊丹豪)



論考本文のページ (撮影：伊丹豪)

(学際融合教育研究推進センター)

[目次に戻る ↗](#)

寸言

「わが家を世界一幸せな
場所にする」

仲井 嘉浩



2020年3月6日 積水ハウスの中期経営計画を発表しました。2030年からバックキャストする形で弊社を変革期と捉え、グローバルビジョンを「わが家を世界一幸せな場所にする」としました。

2017年頃からNEXT積水ハウスを考えるプロジェクトを立ち上げ、喧々諤々議論していく中で、人生100年時代に住宅産業がどうあるべきかといったテーマに収斂していきました。人生100年、幸せに過ごしていくためには何が必要かを因数分解し「健康」と「つながり」と「学び」が重要と結論づけました。この3つは無形資産と呼ばれるもので、お金や不動産や株といった有形資産と対比されるものです。

当たり前のようですが、やはり心身ともに健康の方がいい、孤独よりも家族や友人とつながっていたい、スキルや経験や体験を多く持っていた方が感性豊かに過ごせるのではないかと。そのような住まい手の幸せづくりのパートナーになりたいという思いから、グローバルビジョンを作成し3つの価値を提供していくことへの挑戦が始まりました。

「健康」についても少しお話ししますと、家の中で毎年7万人の方が突然お亡くなりになっています。交通事故死者数の年間約3000人と比較しても、如何に多いかがお分かりいただけるでしょう。原因は脳卒中や心疾患や溺死・転倒などです。早期発見すれば助かったかもしれないという思いから、現在、急性疾患の早期発見に関する実証実験に取り組んでいます。急性疾患対応だけでなく、慢性疾患の予兆を発見し早期受診を促すことにもトライしていきたいと考えています。

「つながり」については、家はもっともっと色々なところとつながっているべきと考えています。核家族化が進行してしまった社会において、遠くのおじいちゃん・おばあちゃん・子や孫と、あたかも同じ空間にいるようにつながっていたり、オンライン診療がストレス無く受けることができるよういつでも主治医とつながっていたり、そんな家があったっていいと思いませんか。

「学び」については、これからの家はずっとアクティブな場所であっていいという発想です。家は今まで安らいで、しっかりと睡眠をとり、くつろぐ場所として考えがちでしたが、これからは、旅行や美術鑑賞などのバーチャル体験で感性を養い、リアルの世界へ旅立つ拠点といったワクワクした空間となるかもしれません。

お気付きのように、これらのビジョンを実現するためには、もはや建設業の域を超えており、「健康」を見守るためのセンシング技術、「つながり」を実現させるための通信技術、「学び」を提供するためのサービス業に関するノウハウなど、様々な知見をお持ちの企業とのオープンイノベーションが必要不可欠となってきます。

京大で培われた、自由で多様性に富み、そして感性豊かな発想力をお持ちの方々と、様々な形でコラボレーションし、さらなるイノベーションが起きることを期待しております。

(なかい よしひろ、積水ハウス株式会社代表取締役社長執行役員兼CEO、
昭和63年工学部卒)

[目次に戻る ↗](#)

随想

「アフリカ潜在力」と
オルタナティブな未来の創造

名誉教授 太田 至



現在の私たちは大変な困難に直面している。新型コロナウイルスの感染者は世界全体で2億3000万人を超え、死者は470万人に達した。失業者が急増し、格差の拡大と不平等、社会的分断があらわになっている。また、この夏には日本だけではなくヨーロッパでも集中豪雨による洪水や熱波による災害が発生している。この異常気象の原因である地球環境の破壊と新型コロナウイルスの蔓延には、この30年間ほどのあいだに急速に進んだグローバリゼーションや、際限のない資本主義の拡張が大きく関与している。私たちには、この状況を深刻に受けとめて人類の未来を再考することが要請されている。

私たちは2011年から「アフリカ潜在力」を旗印とした地域研究プロジェクトを続けてきた。これには80人以上の日本人研究者と40人以上の外国人研究者が参加し、その専門分野も多岐にわたっている。このプロジェクトの原点には、アフリカに対する支配的なイメージへの憤懣があった。未開で保守的な人びと、紛争、貧困や飢餓、疾病の蔓延というネガティブなイメージ。逆に、サバンナや熱帯林、野生動物の楽園、私たちが失った伝統文化、暖かい社会関係といったポジティブなイメージ。両者はいずれもステレオタイプにすぎない。そして国際支援に従事する実務者にも同様の錯誤がある。たとえばアフリカの紛争に対して国際社会は、和平協定の締結や紛争後の政治制度の構築などを支援してきたが、その背後には「アフリカには紛争解決の仕組みがない」「国際社会は人権思想や民主主義など、普遍的な価値観をアフリカ人に教育しなければならない」という自文化中心的な態度が見え隠れしていた。

他方、「アフリカ潜在力」プロジェクトの参加者は、長期にわたるフィールドワークを根幹に据えてアフリカの人々の日常生活に寄り添いつつ研究を続けてきた。アフリカ社会には、たしかに紛争や内戦があるのだが、紛争を解決して共生を実現するために人々がみずから創造し実践してきた知識や制度が存在する。そのことを実感していた私たちは、上記の支配的な認識（ステレオタイプ）に異議を唱えることが重要であると考えた。ただしアフリカ在来の知識や慣習を重視することは、「アフリカには不変の内在的な知恵がある」とロマン化したり、「アフリカの伝統」を固定化・実体化することではない。アフリカは西欧やイスラーム世界など、異質な社会や文化との交渉史のなかでみずからダイナミックに変革してきたことにも私たちは注目した。

さらに私たちは、自分たちがアフリカの生活現場から学んだことは、現代世界が直面する多様な困難を解決するために活用できると考えるようになった。私たち自身の世界観を再考し、支配的な知の枠組を根源から変革する思想を確立すること、それが私たちの中心的な課題となったのである。この研究プロジェクトが掲げてきた「アフリカ潜在力」というスローガンは、「主流の考え方に異議を唱える姿勢」であり、「アフリカの可能性から学びつつ多様なオルタナティブを構想する態度」である。グローバリゼーションや資本主義の拡張に抗してローカルな知識や技術、社会、価値観を再発見し、等身大の生活世界と地域の自立性をとりもどすことは、過去にもどることではない。私たちの世界を脱植民地化・脱西洋化しつつ、新しい未来を創造してゆくことにほかならない。

(おた いたる、平成31年退職、元アジア・アフリカ地域研究研究科教授
専門はアフリカ地域研究、人類学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

頻発する水害と気候変動

佐山 敬洋



今年の夏は、異例づくめであった。感染症の大流行、開催賛否が二分した東京五輪、お盆をまたぐ連日の豪雨。洪水災害を研究する私にとって、特に3つ目も気になるところである。2018年の西日本豪雨でも異例の長雨を経験した。いずれも1週間近く雨が降り続き、西日本の多くの川で水位が堤防の高さ付近にまで達した。西日本豪雨では長雨の後に局所的な集中豪雨が重なり、一部の河川で堤防が決壊する甚大な被害をもたらした。今年8月の豪雨もそうした決壊がいつ・どこで発生してもおかしくない危機的状況であった。

私は防災研究所で洪水予測の研究を進めている。地球上の水の循環を取り扱う水文学（すいもんがく）を基礎に、流域に降った雨がどのように川に流れ込み、どのように川から溢れて浸水するかを数値モデルで予測する。最近では、日本全国の中小河川を対象に河川の水位と浸水を一体的に予測するモデルの開発を進めている。

自然現象をモデル化する研究者には共感いただけると思うが、なぜか自然には実現し得て、頭では理解できるのに、シミュレーションで再現するのは極めて難しい現象がある。日本全国の洪水予測モデルにとって、多くの河川で堤防の高さまで水かさが増え、上流から下流までギリギリの状態は、その最たるものである。シミュレーションでは、流域や河川の設定条件を少し変えれば、あちらこちらで氾濫が生ずる。それを調整しようとする、今度は洪水を過小に評価してしまう。

豪雨と河川の絶妙なバランスの背景には、氾濫が頻発しないように地道に続けてきた長い治水の歴史がある。また、川自体にも、土砂を運搬して自然堤防を造ることで、洪水を溢れにくくする自助作用のような機能を有する。その他、流域の土壌から斜面まで、さまざまな要素が、その気象条件に順応して流域を構成している。溢れるか溢れないかというギリギリのところまで川の水位が達するのには一定の必然性がある。

気候変動の脅威は、その絶妙なバランスを崩してしまうことにある。温暖化で既に雨の降り方が変わってきていること、今後さらにそれが激化することは、既往研究で明らかである。問題なのは、流域を構成する様々な要素の順応速度に比べて、気候変動の影響がより早いペースで出現することにある。これまでギリギリの状態で何とか氾濫せずに堪えてきた河川が、いつも少しのところでも致命的な氾濫が発生する状態に遷移することを懸念する。豪雨と河川の絶妙なバランスを理解したうえで、気候変動に適応する速度を加速するような流域治水を実現する必要がある。

最後に、この洛書というコラム、聞けば1989年から始まった京大広報の伝統的なコラムであるという。治水家として知られる禹王は、黄河支川の洛水を治めて洛書を得たという伝説が残る。現代の治水は、川の研究から築堤まで、専門が細分化されているが、普段の川や災害の現場から、自然の本質を学び取る術を体得したいものである。

(さやま たかひろ, 防災研究所准教授, 専門は水文学, 水工学)

[目次に戻る ↗](#)

探訪

このコーナーでは、職員が本学の研究施設等に実際に足を運び、現場での取り組みや職員が感じたことをレポート形式で不定期にお伝えしていきます。

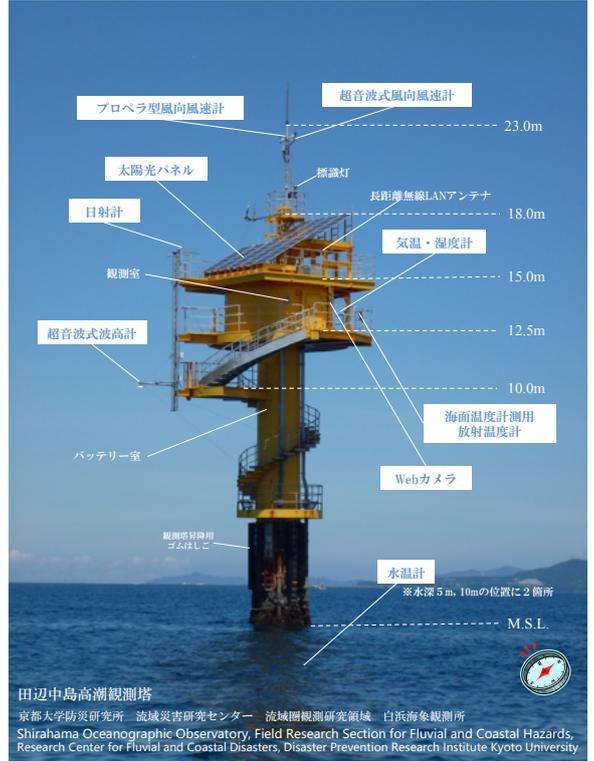
防災研究所附属流域災害研究センター白浜海象観測所

～広報課員が行く～

観光地として名高い和歌山県白浜町の田辺湾沖約2キロの海上に高さ23メートルの黄色の鉄塔がそびえたつ。白浜海象観測所の定点観測施設「田辺中島高潮観測塔」だ。風向・風速計や日射計、気温・湿度・気圧計、波高計、水温計など様々な観測器が取り付けられ、沿岸域の様々なデータを常時観測し、学内の教育研究活動のみならず、学外との共同研究も進められている。防災研究所の馬場康之 准教授と技術職員の久保輝広 主任の協力のもと、観測塔内を取材させてもらった。

訪れたのは8月初旬。観測所近くの港から久保主任が操縦する観測船「海象」に乗り込み、いざ出港。取材日の1週間ほど前から馬場准教授が天候や波の状況を確認し、毎日連絡をくれていた。前日まで天候が心配されたが、当日は運よく好天に恵まれた。心地よい潮風を感じながら進むこと15分ほどで、観測塔が見えてきた。空や海の青色を背景に観測塔の黄色が鮮やかで、真下から見上げると、想像以上に大きく、迫力がある。

久保主任が船を塔近くに寄せ、馬場准教授がロープで観測塔に固定。波で上下する船からタイミングを計りながら、塔についているゴム製のはしごに移り、観測塔内へ。螺旋階段を上ると、観測データを観測所に送るための機器やデータを収集、記録する機器が置かれた部屋がある。「観測されたデータは学内LAN経由で観測所に送信され、自動で観測所のホームページにも公開される」と、馬場准教授が教えてくれた。



船から観測塔へはゴム製のはしごを使って渡る



観測塔内の部屋には計器類が所狭しと並び

部屋の外にあるはしごを上ると、塔の最上部へ出る。足場の高さは約15メートル。海面を見下ろすと思わず足がすくむが、360度見渡す限り海が広がる眺めは絶景だ。最上部には、太陽

探訪

光パネルや観測機器が設置されており、馬場准教授は「さまざまな観測機器は船で運び人の手で設置します。海の上での運搬・設置にあたっては入念な準備が欠かせない」と話す。

現在の観測塔は1993年に設置された2代目。初代観測塔は1961年に、当時の理学部の教員らが中心となり日本初の海洋観測塔として設置、1966年には、観測塔を中心に白浜海象観測所が防災研究所の附属施設として開設された。半世紀以上にわたって、田辺湾沿岸域の気象・海象現象を総合的に観測し、沿岸海域の海洋—陸面—大気間の相互作用の解明などに取り組んでいる。



観測塔の上で説明をする馬場准教授

これまでに、地球温暖化との関係が注目される大気—海洋間の二酸化炭素輸送量の観測や、洋上風力発電の実用化に向けた海上風況に関する基礎研究などを実施。最近では、大気海洋相互作用のモデル化のための観測などが、学内外の研究者によって進められているという。研究者からは、塔に新たな観測器を設置したいという要望が寄せられることもあり、「教職員が観測所に常駐しているからこそ、きめ細かな対応もできる」と久保主任は言う。

研究以外にも、海上保安庁や南紀白浜空港などの関係機関に観測データを依頼に応じて提供しているほか、地元の漁業関係者の方が海の状況を知るためにホームページを確認することもあるなど、観測所が果たす地域貢献の役割も大きい。

毎年、夏季には塔周辺に計測器を集中投入するなど、台風下での気象・海象現象の観測も行っている。今年は、新たにパーティクルカウンターという空気中の粒子を計測する装置を塔に設置し、波が立った際に発生する海塩粒子を常時観測する体制を構築する予定だ。海面から大気中に放たれる粒子を観測することで、大気—海洋間のより詳しい相互作用の解明につながると期待でき、馬場准教授は「沿岸域の気象・海象現象の解明や正確な将来予測につなげるためにも、一つでも多くの現象をとらえ、データを積み重ねることに加えて、強風高波浪時のような観測機会が少ない貴重なデータを捉えたい」と語る。

台風が通過する際には、10メートル近くの荒波にさらされることもあるという観測塔。計測器が波にさらわれるなど塔の維持管理には苦勞も伴うが、「研究や観測を継続していくことが何よりも大切だ」と、馬場准教授と久保主任は声をそろえる。時を経て海上に立ち続ける観測塔が、気象・海象の謎に迫る研究活動の最前線を支えている。



右から、馬場准教授、久保主任

【関連リンク】

白浜海象観測所

<https://rcfcd.dpri.kyoto-u.ac.jp/frs/shirahama/index.html>

(総務部(広報課, 家城健太・藤島幸平))

目次に戻る ↗

話題

本学卒業生の山西利和さんが東京五輪・陸上男子 20km競歩で銅メダル獲得

本学卒業生の山西利和さん（工学部卒）が、8月5日（木）に札幌市で行われた東京2020オリンピック競技大会の陸上男子20km競歩において、1時間21分28秒で銅メダルを獲得されました。オリンピックで本学出身者がメダルを獲得するのは、1936年のベルリン大会の三段跳で金、走幅跳で銅の田島直人さん（経済学部卒）、三段跳で銀の原田正夫さん（法学部卒）以来85年ぶりです。

山西さんは本学陸上競技部出身で、第17回世界陸上競技選手権大会男子20km競歩優勝、第29回ユニバーシアード競技大会陸上男子20km競歩優勝など、数々の功績をあげられています。

レースは中盤以降、山西さんを含む7人が先頭集団を形成。17km過ぎに、山西さんがスパートをかけ、集団から飛び出すと、池田尚希選手とイタリアの選手が追いかけて、先頭集団は3人に絞られました。その後、山西さんは18km過ぎから遅れ始めたものの、粘り強い歩きを見せ、3位でゴールしました。

レース翌日、本学には「感動した」「元気をもらった」など、レースを見た方からお祝いの言葉が電話で寄せられました。

●湊 長博 総長のコメント

山西利和さん、東京2020オリンピック競技大会20km競歩競技での銅メダル獲得、誠におめでとうございます。本学陸上競技部出身の山西さんのご活躍と栄誉に対し、京都大学を代表して心からお祝い申し上げます。

新型コロナウイルスの影響で練習もままならず、さらにオリンピック競技大会の開催すら危ぶまれた中でも、不断の努力を重ね、強靱な精神を育ててこられたことと思います。練習データと結果を科学的に検証し、周囲の意見を参考にし、修正を重ねながら自らのスタイルを確立していく—自らに課題を課し、その解決に向けた努力を重ねることで自ら道を開いていくという、まさに学生時代から京都大学の精神を実践されてきた結果が、見事に今回の栄えある銅メダルという形で結実したのだらうと思います。

山西さんの今回の快挙は、京都大学に学ぶ全ての後輩学生諸君に、大きな勇気と希望を与えてくれるものです。山西さんが、仕事や陸上に真摯に且つ忠実に取り組まれてきた姿は、彼らにとってかけがえのない道標になることでしょう。私たち京都大学の学生教職員一同、山西さんの今後のますますのご活躍を期待しております。

[目次に戻る ↗](#)

株式会社バッファローより医学部附属病院へ屋外用アクセスポイント15台などの寄贈

医学部附属病院は、株式会社バッファローより屋外用無線LANアクセスポイント15台などの寄贈を受け、外来患者呼び出し受信機の駐車場での利用を開始しました。この寄贈は、新型コロナウイルス感染症の影響が続く中で、患者さんがより安心して通院できる環境を整えてほしいと同社より提案をいただいたもので、設置に伴う工事費用も同社より支援を受けたうえで実施されました。



医学部附属病院では、これまで外来患者に呼び出し受信機を渡し、外来診療棟内での診療や会計の順番待ちをお願いしていました。今回、株式会社バッファローより寄贈いただいた屋外用アクセスポイントなどの設置により、これまで圏外であった病院駐車場P1およびP2の全フロアで呼び出し受信機の利用が可能となりました。これにより、外来患者の身体的な負担軽減や、接触機会を減らすことによる安心感へとつながると考えています。



駐車場に設置された屋外用アクセスポイント

2021年8月6日には、寄贈に対する謝礼のセレモニーをオンラインで実施し、株式会社バッファローより牧 寛之 代表取締役社長（2003年経済学部卒）、藤井博康 特販営業部担当部長の2名が参加されました。セレモニーでは、宮本 享 医学部附属病院院長、黒田知宏 同病院院長補佐が、同院に対する深い理解と格段のご支援に対し感謝を述べました。なお、同社からは、本年1月にも、本学図書館機構宛に空気清浄機100台の支援を受けています。



牧代表取締役社長



宮本病院院長



黒田病院院長補佐

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

本学若手研究者とシュプリングer・ネイチャー編集長による座談会に関する記事が「Nature ダイジェスト」に掲載

学術研究支援室(KURA)とシュプリングer・ネイチャー社が共催したオンライン座談会に関する記事(「地球環境問題に挑む若手研究者たちがフィル・キャンベルから得たヒント」)が、学術誌「Nature ダイジェスト」2021年8月号に掲載されました。

KURAの企画運営による同座談会「学問の挑戦と機会：若手研究者とSDGsを越えた先の未来を見据えて」では、本学の4名の若手研究者がシュプリングer・ネイチャー編集長のサー・フィリップ・キャンベル博士と持続可能な開発目標(SDGs)の実現と実践について議論を交わしました。マリオ・ロペズ 東南アジア地域研究研究所准教授がモデレーターを務めた同座談会には、ジュリー・デロス・レイ



Nature ダイジェスト 2021年8月号

話題

エス 東南アジア地域研究研究所特定助教, ハート・ナダヴ・フォイヤー 農学研究科特定講師, 小川敬也 エネルギー科学研究科特定助教, 遠藤 寿 化学研究所助教が登壇者として参加し, 河野泰之 副学長・東南アジア地域研究研究所教授とアントワーン・ブーケ シュプリンガー・ネイチャー日本法人代表取締役社長がコメンテーターとして加わりました。

本記事は, 同座談会に登壇した若手研究者らに対するサイエンスライター取材によって執筆されたもので, 国内外からの多様な参加者が視聴した座談会へ登壇するという貴重な経験から得たものを各自が語ったほか, 日本における若手研究者および海外出身研究者をとりまく近年の困難な研究環境についても率直な意見が表明されました。

【関連リンク】

地球環境問題に挑む若手研究者たちがフィル・キャンベルから得たヒント | Nature ダイジェスト2021年8月号

<https://go.nature.com/kyotoSDG2021>

マリオ・ロペズ「学術分野の境界を越えた社会的寄与:変革をもたらす知識の創出」 | Springer Nature Japan

<https://www.springernature.com/jp/societal-contributions-beyond-academic-disciplinary-boundaries-j/19277436>

Mario Lopez “Societal contributions that go beyond academic disciplinary boundaries: producing knowledge for change” | Springer Nature

<https://www.springernature.com/gp/researchers/the-source/blog/blogposts-communicating-research/societal-contributions-beyond-academic-disciplinary-boundaries/19204828>



座談会での発表スライドの表紙



座談会開催後の登壇者と運営メンバーの集合写真

(学術研究支援室)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、益川 敏英 名誉教授、木村 敏 名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

益川 敏英 名誉教授

益川敏英先生は、7月23日に逝去されました。享年81。

先生は、昭和42年名古屋大学大学院理学研究科博士課程を修了して理学博士の学位を授与され、名古屋大学理学部助手等を経て、同45年5月京都大学理学部助手に就任されました。同51年4月東京大学原子核研究所助教授に転出された後、同55年4月京都大学基礎物理学研究所教授、平成2年11月同理学部教授、同7年4月同大学院理学研究科教授、同9年1月同基礎物理学研究所教授を歴任し、同15年3月定年退職され、京都大学名誉教授の称号を授与されました。



この間、先生は篤実な人柄と深い学識をもって、学部学生、大学院学生の教育、研究指導にあたり、多くの優れた後進研究者を育成されました。また、平成7年12月から1年間学生部長、留学生センター長、体育指導センター長を併任され、学生との対話にも気さくに応じられました。同9年4月より3期6年間にわたり、京都大学基礎物理学研究所長ならびに京都大学評議員を併任し、全国共同利用研究所としての研究活動の円滑な運営と発展に寄与するとともに、本学の管理運営に参画し大学行政に貢献されました。

一方、研究面において先生は、多年にわたり、素粒子理論の研究・教育に努め、昭和48年に小林 誠 高エネルギー加速器研究機構教授（当時京都大学助手）とともに、物質を構成する基本粒子のクォークが少なくとも6種類あるとする予言を理論的に提唱し、さらに宇宙組成の謎を解明する「CP対称性の破れ」の現象を説明する「小林・益川理論」を発表されました。これらの成果は素粒子物理学、宇宙物理学の多くの研究分野の発展に極めて大きな影響を与えるものであり、これらの業績に対して、同60年6月に日本学士院賞を受賞し、平成13年度の文化功労者として顕彰され、同20年には文化勲章、ノーベル物理学賞を受賞されました。

(基礎物理学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

木村 敏 名誉教授

木村敏先生は、8月4日に逝去されました。享年90。

先生は、昭和30年3月京都大学医学部医学科を卒業後、同34年9月から同医学部附属病院助手、同38年10月滋賀里病院医師、同40年9月水口病院医師、同44年2月ハイデルベルク大学精神医学教室客員講師、同45年11月名古屋市立大学助教授、同49年12月同教授を経て、同61年5月京都大学医学部教授に就任、精神医学を担当されました。この間、昭和39年12月には医学博士の学位を京都大学から授与されました。

平成6年3月、停年により退官し、同9年3月京都大学名誉教授の称号を受けられました。

本学退官後は同7年4月から同8年3月まで龍谷大学社会学部教授、同8年4月から同13年3月まで同国際文化学部教授、同21年4月から河合文化教育研究所所長を務められました。

先生は、永年にわたって、精神病理学の研究と教育、後進の指導に努められ、自己論・時間論など極めて独自性の高い研究が国内外で高い評価を得られました。また、関連諸分野への広い影響力を発揮されたほか、多数のドイツ語文献の翻訳出版を行い、精神医学とその関連分野の発展に貢献されました。主な著書に『人と人との間』、『時間と自己』等があります。

また、平成4年10月から同13年10月まで日本精神病理学会理事長の要職を務められました。

これらの教育研究における顕著な業績が評価され、昭和56年にフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞、平成11年に国際哲学・精神医学学会表彰を受けられました。

(医学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



京大広報
No.758

令和3年9月30日 発行

発行 京都大学総務部広報課
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。
「京大広報」の既刊号は、次のURLでご覧いただけます。
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大力、新輝点。



京都大学は2022年に創立125周年を迎えます
URL:<https://125th.kyoto-u.ac.jp>